



メール マガジン版 音楽の世界

第4号 日本音楽舞踊会議 (CMDJ) 2003年9月18日(木) 発行
The COMMITTEE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169-0074 新宿区北新宿 2-25-8 FAX 03-3369-7496
<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

メールマガジンの発行にあたって 事務局長：中島洋一

この度、メール・マガジン版『音楽の世界』を発行することとなりました。
こメール・マガジン発行の目的は、日本音楽舞踊会議とい団体およびその活動内容を紹介すること、
そして機関誌『音楽の世界(活字版)』の内容を紹介することが、主な目的ですが、それだけではなく、
読者に自由に投稿してもらい、それを分け隔てなく読んでいただく雑誌として発展させて行
きたいと考えています。

もちろん、この雑誌は申し込めば、どなたでも自由に購読出来ますし、購読の打ち切りも自由で
す。

発行回数など今後のことはまだ未定ですが、活字版『音楽の世界』の月刊に対して、このメルマ
ガ版『音楽の世界』の発行は不定期とし、大体年に5～6回程度の発行をめざしたいと思ひます。
文書の形式については画像などを簡単に取り込める長所がある HTML 形式も検討しましたが、文
書サイズ、汎用性の両面を考え、テキスト形式でスタートすることにしました。

また、このメルマガは日本音楽舞踊会議関係者だけではなく、読者のみなさんと一緒に発展させ
て行く雑誌にして行きたいと考えておりますので、みなさま方のご協力をよろしく、お願い致しま
す。

このメルマガに記事を掲載したい人、また購読を進めたい人がおりましたら、事務局長にメールを
お送り下さい。

メールの宛先：中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

+++++
メールマガジン版 『音楽の世界』 第4号 内容

1) ごあいさつ

2) 日本音楽舞踊会議よりのお知らせ

A. 『音楽の世界』最新号の紹介

B. コンサート、研究会の紹介

・『Compositions 2003』～エレクトーンのための新作コンサート

9/19(金): 19:00～エレクトーンシティ渋谷・メインスタジオ

・20世紀の音楽 『新ウィーン楽派の音楽とその伝播』

- 9/24 (水): 19:00 ~ 目黒パーシモンホール
 ・『金子みすゞの世界』 声楽部会サロンコンサート vol.3
 10/6 (月) 19:00 ~ 日暮里サニーホール コンサートサロン
 ・研究部会例会 『19世紀ロマン主義の展開と黄昏2』
 ~ 20世紀の社会、文化は19世紀から何を引き継いだか ~
 9/21 (日): 15:00 ~ 金原宅

- 3) 戸田邦雄先生の思い出 助川敏弥 (作曲家/会代表委員)
 4) ウェルズの「宇宙戦争」と現代文明 助川敏弥
 5) 「平和市長の会」について 田野純子 (NGO:リボン所属)
 6) 『19世紀ロマン主義の展開と黄昏2』
 ~ 20世紀の社会、文化は19世紀から何を引き継いだか ~
 の発表を前にして
 ~ 3つの断章 ~ 中島 洋一
 7) 舞踊と音楽の新作に挑む 第一章
 ~ なぜ『火の鳥』を新作の素材として選んだか ~
 中島 洋一
 8) 上海にて譚盾の新作・チェロ協奏曲を聴く 小山内めぐみ
 9) コンサート評 ~ 最近の日本の現代音楽 ~ 西 耕一

「早春さわやかコンサート」
 「NO TO WAR / 音楽家たちの平和セッション4・29」
 陸上自衛隊中央音楽隊第52回定期演奏会、
 オーラ」「共楽の和」
 「現代日本のオーケストラ音楽第27回

- 10) 音楽会評 畑山千恵子
 迫昭嘉 ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲ツィクルス第7回
 コーロ・ソフィア 第6回演奏会
 二期会「ばらの騎士」
 杉谷昭子 ベートーヴェン、ピアノソナタ全曲演奏会 第4回
 11) ピアノで綴る癒しのメロディー 広瀬美紀子
 ~ リサイタルを開くにあたって ~

12) 訃報

+++++

1) 《ごあいさつ ----第四号----について》 中島洋一

第3号発行から、約3ヶ月を経てメールマガジン版『音楽の世界』第4号を発行する運びとなりました。

このメールマガジンも第4号を数えるにいたり、次第に日本音楽舞踊会議の枠を越えた広がりをみせて来ておりますが、今号では、日本の伝統音楽の演奏家でニューヨークにご滞在で、国連関係のNGO、リボンで活動されている田野純子さん、中国の現代音楽の研究をされている小山めぐみさん、黛敏郎の研究者でもあり日本の現代音楽を広く紹介する活動をさせている西耕一、以上の三名の非会員の方々から長文のご寄稿をいただきました。

我が国のみならず世界同時不況などといわれ、人々が生活することで精一杯で、芸術、文化といったものに関心が向きにくくなっている状況の中で、芸術、文化について関心を抱く人々が、お互いに語り合い、連帯の輪を広げて行くための媒介となりうるようなメール雑誌を目指して、創刊いたしました。皆様のご協力を得て、そのような目標に一步一步近づきつつあることは、編集者として、まことにもって喜ばしい限りです。

他に、会のコンサート、研究会の紹介記事。会代表委員：助川敏弥の7月に他界された作曲家戸田邦雄氏への追悼文、評論、中島洋一の『舞踊と音楽の新作に挑む 第一章』など、かなり長目の文章が掲載されております。

我が誌は、文化、芸術を扱った、この種のメール・マガジンの中で分量的にも、内容の面でも決してひけをとるものではない、と自負しておりますが、配布する文書形式を、いままで通りテキスト形式で通すべきか、HTML形式に切り替えるべきか悩んでおります。

HTML形式ですと、目次の欄から、リンク機能を使うことにより、読みたい記事に飛ぶようにすることなどが簡単に出来るからです。

しかし、すべての人々が読めるようにするためには、少々不便でも、やはり、いままで通りテキスト形式で配布するのがベターではないかと考えております。 次回の発行は12月頃を予定しておりますが、このメールマガジンは投稿自由となっておりますので、多くの方々から文章を寄せてくださることを期待しております。

+++++

2) 日本音楽舞踊会議よりのお知らせ

A. 『音楽の世界』最新号の紹介

2003年(8/9月合併号)

論壇： もっとはやく、もっとおモク(西山淑子)

特集・鼎壇：これからどうする？電子オルガン！
(鱸「すずき」眞次、阿方俊、野口剛夫)

追悼： 戸田邦雄先生の思い出(助川敏弥)

特別寄稿： 今また考えること(菊地梯子)

好評連載 CDマニアのひとりこと(小山田豊)
音楽家のためのオーディオ嘶(高島和義)

プログラム ジャパン・エレクトロニック・オーケストラ第10回演奏会
COMPOSITIONS 2003(作曲部会公演)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kikanshi/saisin.htm>

+++++

B. コンサート、研究会の紹介

『Compositions 2003』～エレクトーンのための新作コンサート

9/19(金): 19:00～エレクトーンシティ渋谷・メインスタジオ

毎年のように行われているエレクトーンの新作発表会です。
日本音楽舞踊会議は『Compositions』シリーズを通して、もっとも多くのエレクトーンの新作を発

表している会ですが、今年の発表者は木幡由美子、浅香満、福地奈津子、松本淳一、菊池雅春の5氏で、コンサートの実行委員は昨年に引き続いて西山淑子が担当します。

今年も全日音研の協賛をえて、エレクトーンの独奏曲、二重奏曲の他にエレクトーンと他楽器によるアンサンブル作品なども初演されます。

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con30.htm>

20世紀の音楽 『新ウィーン楽派の音楽とその伝播』

9/24(水): 19:00 ~ 目黒パーシモンホール

一昨年からはじめられた、会主催の【20世紀音楽シリーズ】の流れをくむコンサートですが、企画はシュエーンベルクとその弟子達による新ウィーン楽派とその周辺の作曲家達による作品を集めて演奏する、ユニークな企画性のある催です。

プログラムの概要は以下の通りです。

シェーンベルク 4つの歌 作品2-1より 『向上』、『森の光』
ソプラノ：金山道子 / ピアノ：山田武彦
ベルク ピアノ・ソナタ 作品1 ピアノ：古川五巳
ベルク 初期の7つの歌曲
ソプラノ：島信子 / ピアノ：松山元
シェーンベルク 3つのピアノ曲 作品11 ピアノ：松山元
スカルコッタス ヴァイオリンとチェロのためのデュオ
ヴァイオリン：安田明子 / チェロ：安田謙一郎

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con04.htm>

『金子みすゞの世界』 声楽部会サロンコンサート vol.3

10/6(月) 19:00 ~ 日暮里サニーホール コンサートサロン

西山淑子作曲：金子みすゞの詩による歌曲のコンサートです

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con17.htm>

研究部会例会 『19世紀ロマン主義の展開と黄昏2』

~ 20世紀の社会、文化は19世紀から何を引き継いだか ~

発表者：中島洋一(作曲)

第1回 6月21日(土) 金原礼子宅 15:00 ~ 17:30

第2回 9月21日(日) 金原礼子宅 15:00 ~ 17:30

《内容》

発表内容は、19世紀から20世紀に至る芸術思潮の流れを、音楽を中心にしながらも、文学、美術、思想などまで広げて探ってゆこうというものですが、1回目は、ゲーテ、フランス革命、そして、ワグナーに触れましたが、今回は、前回のワグナーを中心とした19世紀芸術に引き続き、ドイツ表現主義、フランス印象主義(象徴主義)の音楽、美術とドストエフスキーを中心に19、20世紀の文学に触れ、その時代の芸術家達をはじめとした鋭敏な魂が捉えた、人間存在の不安といっ

たものはいかなるもだったのか、現代人の心の深層部にあるものはいったい何か、といったことについて、発表者自身の心で捉えたものを通して語ってみたいと思います。後半は、ディスカッションに多くの時間を割きたいと思います。

なお、9月24日開催のコンサート『新ウィーン楽派の音楽とその伝播』とも内容が重なり合う部分がありますので、20世紀の芸術に関心がおありの方のご参加も期待します。

研究部会例会の発表は、レクチャーといより、すべての参加者が各々の意見を自由に発言することが認められる、座談会形式を取り入れた形で、進められますので、興味がおありの方、ディスカッションに加わりたい方は自由に参加してください。

出席予定者は、日本音楽舞踊会議の研究部会（音楽学、作曲）が中心ですが、他にドイツ文学者なども列席する予定です。

参加申し込み、および質問については、中島洋一までメールまたはFAXをお願いします。

URLは以下の通りです。

金原宅の地図がほしい人はweb上から請求できます。

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kenkyu/K-bukai2003-1y.htm>

3) 戸田邦雄先生の思い出 助川敏弥

戸田邦雄先生が亡くなった。2003年7月8日、87歳。先生とは1998年に「音楽の世界」のためにお話をお聞きするため、成城でお会いした。対談ではなく、私は聞き手だった。この文は、「音楽の世界」に二回にわたって掲載され、いまでも、インターネット、日本音楽舞踊会議のホームページで全文読むことができる。先生は外交官であり、ヒトラー、スターリン健在当時のドイツやソ連での見聞と経験は興味つきないものである。未読の人はこの機会にぜひ読んでほしい。

私たちの世代にとって、戸田邦雄先生は、作曲家であるばかりでなく、名文の筆者であり、名翻訳者であり、総合雑誌なみの時事評論の論客で、その他もろもろの魅力で青年を魅きつける人であった。作曲家はその作品への評価ことこそ敬意の表明であるという。それは存分承知だが、戸田先生の魅力はその作品は当然ながら、どうしても、はばひろい文人としてのそれにある。文人という言い方こそ、戸田先生をよく表わすものである。外交官であって、作曲家、文章家、時事評論家、などなど、いま風に言う、多角的とか、多彩なとかいう言葉では包めない人で先生はあった。複数の才を発揮するというのではなく、それ等全部が一人の人としての先生の魅力を造っていた。

プロコフィエフが亡くなった時、「音楽芸術」に掲載された追悼文はいまもなお忘れ難い名文であった。先日亡くなった近衛秀健君が、興奮して雑誌片手に私の下宿に舞い込んで来たことを思い出す。言葉の選び方、表現が美的で的確で個性的なこと、それは先生の文学的資質がいかにすぐれていたかを表していた。プロコフィエフの第六交響曲の終楽章が急に陽性になることについて、ロシア音楽の伝統と推移を多々論じたあと、これは「隔世遺伝」であると書かれた。その言い方は音楽評論には無いもので、おもしろかった。当時評判だった12音技法、ドデカフォニズムについては、そもそもイズムという語尾はいろいろな使われ方をするので、主義主張の意味ではなく名詞化のためにだけ使われることがあると説き、「リューマチズムをリューマチ主義と訳したら助けてくれと言いたくなる」と。これはおもしろかったし、よく解った。

12音技法のセリーを「音列」と訳したのも先生である。その音列を分断したものを、「線分」にならって「列分」と訳した。シェーンベルクの主張で、主題は現われる時つねに前と変っていないなければならないという「perpetual Variation」という言葉がある。

「perpetual」という言葉は、絶えることがないという意味で、曲名では「Perpetual Motion」が「無窮動」と訳される。この「perpetual Variation」を戸田先生は「永久変奏」と訳した。外国の言葉を今

のように無神経なカタカナ表記ではなく、翻訳臭のない落ち着いた日本語に的確に置き換えていく。こういう所は、西洋の哲学用語を巧みに日本語に置き換えた西周（にしあまね）のような明治の文人の気風を思わせる。事実、戸田先生には明治時代の文人の気質があった。知的な遊び心とでもいうものが先生にはあった。

忘れてはならないことが一つ。12音技法を日本にもたらしたのは戸田先生である。第二次大戦で日本が降伏した時、先生は外交官として、いまのベトナムにおられ、抑留された。その時フランス人職員が差し入れてくれたのが、フランス語で書かれたライボウィッツの12音技法の本だった。先生がその本と共に引き上げ船で横須賀に着岸されたのが12音技法の日本上陸である。

先生の作品では「交響曲」が好きだった。この自作分析がまたおもしろく、読みふけた。第二主題は譜例も見ていたのでいまも覚えている。成城でお会いした時、この第二主題を私が口ずさんだら、先生は目をまるくしておられた。遠い昔の作品を見ず知らずだった者が覚えていて口にするなど、作曲家としてこの上ない驚きと喜びである。お元気な内にこれだけは出来てよかった。

先生はこの会の賛助会員でもあられた。「音楽の世界」が財政困窮した折にはカンパも頂いた。さまざまな思い出の中で先生は私の中で生きている。私は先生にさよならを言わない。

2003年7月

作曲・代表委員 助川敏弥

4) ウェルズの「宇宙戦争」と現代文明 助川敏弥

H. G. ウェルズの小説「宇宙戦争」、原題「War of the World」今から約100年前に書かれたものだが、SFの古典として現在も高く評価されている。1950年代にはジョージ・パルの監督で映画化され、その迫力は凄まじいものだった。「この映画を見終って外に出た人は、地球が安全であったことを神に感謝するだろう」と言われたものである。この小説は、以来、宇宙人との「侵略型」遭遇の元祖となり、スピルバーグが「未知との遭遇」で「友好型」遭遇を創始するまで、異星人との遭遇の定型となった。この小説の中に登場する火星についてSF評論でもしばしば取り上げられ、タコ型火星のイメージは、これまた長らく火星のイメージとして固定した。

しかし、実は、この小説でウェルズが訴えたことは火星の生態にあるのではなかった。ウェルズがここで火星として描き出した生物は、実は人類の未来の姿なのである。つまり、ウェルズは、この小説で、火星の姿を借りて現在の人類文明を批評し未来を警告したのである。この小説は、SFの形をとった文明批評である。この点を看破した評論がほとんど見当たらないのはまことに残念というほかない。

それでは、ウェルズは火星をどのように描いているだろうか。

まず、頭脳が発達し、それに反比例して肉体は退化する。全身はほとんど巨大な脳だけとなる。肉体の役割を果たすのは精妙に造られた器材である。「肉体」は、目的に応じて衣服のように「着替える」。これは、自動車、飛行機、その他の無人機器の発達と、なかでもコンピュータの発達による器材の進化を思えば戦慄的なほど現代文明のあり方を衝いている。自動車は、運転者という頭脳を持った鉄の肉体である。産業用ロボットに見るように、コンピュータにより精妙に制御された器械は、あたかも天然の肉体のごとく「頭脳」と一体となり精確に動作する。

「機械装置が完成して結局は四肢にとって代り、化学的手段が完成して消化作用が不用になり、髪、外形的な鼻、歯、耳、顎などは、もはや人類の本質的な部分ではなくなり、自然淘汰の傾向は来たるべき時代を通して、そういう器官の着実な退化をもたらす方向に向かう」。「脳髄だけが枢

要な必要物として残る。からだのいまひとつの部分が残存する強い可能性を持っているが、それは、脳髄の教師であり、代理人である手である。からだのほかの部分は衰退するのに反して、手だけはしだいに大きくなるだろう。「火星にあっては、生物の有機組織の動物的部分が、知性によって現実に廃絶されてしまっている。」井上勇訳・創元社刊

火星人は人間の都市と生活を容赦なく破壊する。しかし、いままで人間が動物たちをどうあつかってきたか。いや動物だけでない。相手が人間であっても、弱者に対して仮借ない残虐と横暴を加えてきたではないか。それを思えば、同じことを火星にされても果たして文句がいえるか。ここでは、イギリス人であったウエルズは、20世紀の初頭、世界中に広がった植民地での先進国の横暴を告発しているである。

肉体を持たない頭脳は冷徹であり冷酷である。最近のハイテク兵器を見ると、人間の一部はまさにウエルズの描く火星に近づきつつあることを思う。アフガニスタンでもイラクでも使われたプレデターと呼ばれる無人偵察機、これは攻撃にも使われる。タリバンやイラク兵は、姿の見えない敵との戦いを強いられたと言われる。ピンポイントで襲うミサイル。2005年には地球の裏側まで二時間で到達する無人爆撃機が出来るそうである。

肉体を持たない冷徹で冷酷な頭脳。最新の戦術思想は、高度技術を駆使して、可能な限り戦闘を無人化すること、それによって人間の兵士の仕事は可能な限り少なくすることだという。もちろん自軍の兵士である。湾岸戦争、アフガニスタン戦争、イラク戦争と、兵器はますます無人化し、宇宙人と化した人類の一部は、まだそうなっていない国と人を容赦なく襲う。ウエルズの描いた「宇宙戦争」は、地球上の戦争としてすでに現実化しているではないか。

しかし、ウエルズによれば、火星人は地球の細菌によって滅びる。目に見えるものは破壊できたが、目に見えないものは戦術の範囲を超えていた。目に見えないものは細菌とは限らぬ。ウエルズの小説の予言が意外な形で再現することがないとは言えない。

ウエルズが一貫して描写していることは、火星文化の持つ能率性への指向である。能率、効率、すべてはその向上を唯一の目的として彼等は「進化」を続け、極点に至ったのが現在の姿である。能率、経済性という点からすれば、恋愛などというものは、無駄な感情の高揚と浪費である。無駄を廃するため、男女の性別は次第に退化し消滅に至る。非能率的なものはすべて退化消滅する。筋肉を持たないために疲労ということがない。そのため睡眠を必要としない。あたかも心臓が停止しないように24時間無駄なく働く。至って効率的であり生産性はこの上なく高い。食事は、食用動物の血液をそのまま吸引する。そのため消化という無駄な肉体の労務は省かれ、消化器官は退化消滅し存在しない。

こうした、効率主義、経済能率主義から見れば、芸術はその反対の極に位置するものになる。これほど不経済なものはない。最少のコストで最大の成果をねらうのが効率主義である。しかし、芸術はその反対で、最少の目的のために最大の努力を払わねばならない。効率主義の価値観が支配的になるほど芸術は追いやられる。

さて、イラクの治安維持が困難をきわめている。目に見える敵は倒したが、目に見えないものの逆襲が始まる。ウエルズが細菌として表現したものは、人の心、心の中の敵意とそこから発する抵抗、そんなものにも置き換えて考えることも出来るではないか。とすれば、この小説は恐るべきひろがりを持った政治小説であったとも言える。単なるSF小説などではない。

作曲・評論 助川敏弥

5)「平和市長の会」について 田野純子(NGO リボン所属)

「平和市長の会」について日本の友人にメールを送りました。千恵さんも読んで下さいますか
核爆弾全廃を願って1982年に設立された非政府団体(NGO)です。2002年10月1日の
時点で105カ国532都市がメンバーになっており(アジアを例に取ってみますと、中国-7都
市/インド-11都市/ネパール-5都市/スリランカ19都市等々)会長は広島市の秋葉忠利市
長です。去年の秋、国連での小さなミーティングで秋葉市長がお話になり、その存在を知りました。
きれいな英語で御自分の信ずるところを明確に述べられる市長に「日本にもこういう市長がおられ
るのだ」と誇らしく思いました。

秋葉市長のスピーチに感動したりボン・インターナショナルのメンバーが(出席者は皆感動して
いたのですが)ミーティングの後市長とお話をし、発憤してブルームバーグNY市長にもメンバ
ーになってもらおうと働きかけることになりました。NY市庁国連出張所のオフィスに何度か足を運
びミーティングをしたのですが、努力は報われませんでした。私達はしょんぼり帰ってきたので
すが、私にはもう一つ「しょんぼり」する理由があったのです。

事前に平和市長の会のメンバーリストを再チェックして愕然としました。なんと日本はたった二
つの都市(広島・長崎)しかメンバーになっていなかったのです。よその国の市長さんに呼びかけ
ても「あなた御自身のお国は唯一の被爆国でありながらたった二つの都市しかメンバーになってい
ないではないですか」と反論されたら本当に困ったことでしょう。

今世界は20年前の冷戦時代と同様、いやそれ以上に核戦争の危機にさらされています。私のよ
うな普通の人間がそう感じているのに、世界の政治家の大多数がそれを感じていないか無視して
いるのはとても不思議です。

冷戦時代の昔からコンピューターを駆使した今日まで、未来をテーマにした映画がいろいろ作ら
れてきましたが、それらのほとんどが未来を大変暗いものに描いています。私達が心の奥底で「こ
のままでいたら取り返しのつかないことになる」と本能的に感じていることの表れのように思いま
す。

この夏二つの Hiroshima/Nagasaki Day に出席しました。一つは8月5日(日本の8月6日)NY
仏教会で行われたもので、小さい子供達から年配の方々までが集まりました。仏教・キリスト教・
イスラム教・ユダヤ教の聖職者がそれぞれの言葉で祈りを捧げ、この世に祈る心は一つであること
を改めて教えてくれました。NY在住の協会の方々の方々のスピーチの中、秋葉市長のスピーチも代読さ
れましたが、核廃絶を願う市長の世界へ向けての力強い声明にそれまで敬虔に頭を垂れていた出席
者全員は拍手を止めることが出来ませんでした。

8月9日はその前日にNYについた「ピース・ボート」(国連NGO/本部は東京)主催の
Nagasaki Day が催されました。私達リボンのメンバーも、世界中から送られてきた何百ものリボ
ンを持って参加しました。スピーチ・祈り・歌等と共に、アメリカからは10代の子供達がHIP
HOP を踊り、日本からはピース・ボートに乗り主に戦争で痛めつけられた国々を旅している若者
たちが沖縄エイサーとソーラン節を若い感覚で力強く踊りました。最後は参加者皆も手を振りなが
ら踊って一つの思いを分け合いました。(リバーサイド大聖堂で行われたのですが、神様も普通の
讚美歌とは違うモダンな音楽と大きな音にさぞびっくりされたことでしょう。でもとても喜ばれて
いらしたと信じています。)

この二つの祈りの会に参加して思いました。私達の今の幸せは今までの戦争又今も地球の各地で
起こっている戦争で亡くなられた世界中の方々の痛みの上に築かれていると。私達がそれを忘れて
大切にしなければその方達の死が無になると。

何故核戦争がいけないかを私達日本人は広島・長崎を通して知っています。その“知っている”
ということにおいては、広島・長崎について勉強し核問題を憂えるこちらの人々と同じはずなのに、
何か説明が出来ない違いがあるように思えるのです。

その時その場にいなかったのに、何だか私達の遺伝子が知っているような……。だから日本で
生まれ育った私達は、核戦争をなくすことに他の国の人達よりも深い役目を担っているのではない
かと感じるのです。

そこで提案なのですが、皆で日本のメンバー都市を増やしませんか?友達に「平和市長の会」に

ついて話してあげましょう。地元の議員さんや市長さんにメールを送りましょう。これなら一人でも出来ます。駄目でもがっかりしないで。そう言う私だって駄目だったのですから。でも「思って行動する」ことが、あたりに漂うネガティブな“気”を少しでも変えるのではないかと思いませんか？2人が同じ事をしたら“少し”の二乗になるし、100人になったらもっとになります。

国連には核を世界からなくしたいと願うNGOが沢山ありますが（リボンもその一つです。）来年か再来年（原爆投下60周年）に国連の見学者用入口ホールで広島・長崎展を開くことを企画しています。何故核戦争を起こしてはいけないのか、口をきわめて説明するよりも原爆で破壊されたもの一つ一つを見てもらう方がより深く理解してもらえます。

ずっとお話ししたいと心に掛かっていたことを書いていたら長くなってしまいました。最後まで読んで下さって有難うございました。

田野純子：日本舞踊および地唄舞の分野で活動する音楽家
NY在住、国連関係の平和運動（NGO）リボンで活躍

「平和市長の会」 <http://www.pcf.city.hiroshima.jp/mayors/>

「リボン」 www.peacecoalition.org/project/ribbon

田野純子 www.japanesedance.com

6) 『19世紀ロマン主義の展開と黄昏2』

～ 20世紀の社会、文化は19世紀から何を引き継いだか～
の発表を前にして 【3つの断章】

中島 洋一

西洋芸術史において、ロマン主義とは時代的には18世紀末から19世紀中頃までをさすようです。文学ではゲーテの『若きヴェルテルの悩み』からホフマン、ワーズワース、スコット、バイロン、ミュッセ、サンド、ユゴーのような人まで、画家ではドラクロアなど、しかし音楽の世界では、ヴァグナー以降の、ブルックナー、マーラーといった人達も、ワグナーの流れを汲むロマン主義の作曲家に含まれます。よく、音楽の分野においては、他のジャンル比べ。同種の芸術運動が遅れて起こるといわれますが、私は必ずしもそうは思いません。ベートーヴェンは意識的に自分の主観的世界を表現しようとした人で、あきらかにロマン主義の範疇に入るでしょうし、18世紀後半の感情過剰様式といったものにもその兆候は見られます。音楽においてロマン主義という区分が他の芸術分野に比べ半世紀以上も引き延ばされているのは、音という表現手段が抽象的且つ主観的で、文学や絵画のように。ロマン主義に続くリアリズムの時代を持たなかったこと、18世紀に完成の域に達した機能と声に基づく作曲技法が発展、変貌しながら20世紀初頭まで続いたことなどが理由とみなされますが、この問題について深く触れる機会は、9月21日の研究会におけるディスカッションを待ちたいと思います。

ただ、私には今の我々の生活や価値観も、19世紀から多くを引き継いでいるように思われます。

私が第一回目の発表の冒頭に、ゲーテからカフカ、サミエル・ベケットにまで触れたのも、そういう思いがあったからです。また、ゲーテの文学に触れた後、フランス革命に触れたのも、『自由、平等、博愛』といったデモクラシーの起点がそこに見いだされるという政治思想上の問題より、そこに、人間が己の欲望を解放することで手に入れた、『栄光と悲惨』、『光と影』を見いだしたからです。19世紀以降、個人が解放された結果、訪れたものは、物質主義、と精神主義、卑俗なものと、崇高なもの、醜い現実と、理想というような、分裂と混乱が溢れる世界でした。そのような社会の中で、繊細な魂を持つ芸術家のような人種はどんどん孤独になって行きます。

ところで、リアリズムは芸術思潮の面ではロマン主義に対抗する運動のように思われますが、醜い現実を直視し、それを暴くことは、現実社会に対する個人の戦いだったと思います。ロマン主義者が『夢を示すことで』現実を越えようとしたのに対して、リアリストは現実を暴くことで、現実に対して戦いを挑んだのではないのでしょうか。ロマン主義 リアリズムの精神的継続性は、例えば、

『ノートル・ダム・ド・パリ（ノートルダムのせむし男）』から、『レ・ミゼラブル（ああ無情）』に至るユゴーの変貌にも表れていると思います。

社会との乖離、孤独、そのような精神状況の中で、人間は深い存在不安に襲われます。『自分が命をかけても守ろうとしている一番大切なものは、ひょっとすると周囲の人間にとっては何の価値もないものかもしれない』、そのような疑念にとりつかれることによって生ずる心の不安は、多くの人々が青春時代に体験するものではないかと思いますが、19 - 20世紀の時代、繊細な心を持つ人々は、慢性的にそのような心の不安に取り憑かれていたのではないかと想像します。

話が私事になりますが、私にとって、ドストエフスキーを読んでいた頃が、そのような不安がもっとも昂じた時期だったように思います。そして、ドストエフスキーを読むことで、さらに谷底深く落とされたましたが、やがて、そこから脱却する力をもらうことが出来ました。

ところで、前号に掲載した文章『私と読書』の中で、私がゲーテの『ファウスト』を夢中で読んでいた頃、同世代の文学青年達の間ではサルトルが流行っていた、という話をしましたが、ドストエフスキーを接点にして、ゲーテを読んでいた私と、サルトルとを読んでいた同世代の青年達の心が、多少なりとも重なり合える可能性が出てきたと思います。

以下の3つの断章は、間接的に2回目の発表のヒントになるものが含まれていると思いますので掲載します。

第1章 中学時代のある出来事

私は中学生の頃は、登校拒否などを起こす問題児ではなかったものの、学校の勉強はそっちのけで物思いに耽ったり、冬、雪が吹き込む校舎の中でも裸足で過ごしたり、他の子供達や先生方からみたら風変わりに映る子供だったと思います。私が、学校の門の前に姿を現すと、始業ベルがなるので『精工舎』というあだ名をもらいました。つまり、毎日、確実に3分くらい遅刻したということです。

ある日、祖母が、「中学のA先生が下した私の評価について」かんかんに怒って話してくれました。というのは、A先生は継母の友達の友達ということで、継母と顔を合わせたとき、私の話をしたのだそうです。継母が私のことを聞くと「あの子は、正義感も責任感も協調性もない。人間的にはゼロだ」と言ったらしいのです。でも、「学校の勉強が出来るから」と継母が言い返すと、「出来ると言っても数学など理科系の科目だけで、他は（もちろん音楽は別）まったくだめだ。」と言われたらしいのです。継母は優しい人でしたし、普段接している私を見ていて、その評価が腑に落ちなかったので、祖母に相談がてら話をしたのです。祖母は「A先生には全然人間が見えていない、やっぱり女はだめだ（A先生は女の先生でした。）とかんかんでしたが、しかし、祖母が怒ったり心配したりするまでもなく、周囲の人間がみな、A先生と同じように私を見ていた訳ではありません。竹馬の友などの評価では「洋一君は変わったところがあるけど、結構、正義感が強く曲がったことが嫌いのところがあるよ」とか、「結構親切なところがあるよ。それに借りたものを返さなくとも、あまり文句も言わないし」と、そんなところだったと思います。

ところで、私はA先生は嫌いではありませんでした。確かに正義感が強いものの、やや単細胞的なところがありましたが、子供達に対して、いつも情熱と愛情を持って接しようとしていることは、ありありと判りましたし、それにやや意図的に風変わりな少年を演じていた私が、好人物ながら単純に思えるA先生から、そのように見られたとしても、しょうがないかな、と思ったりしました。

それにしても、「人の見方は十人十色」と言ってすまされないほどの大きな評価の隔たりです。その頃、私に対する評価の食い違いについて、私はそれほど気にはとめませんでした。が、「ものがある（存在する）ということ、見るからこそあるのであって、見えなければいけないということに等しいではないか。あるものごとが単純に見えるのは、それを見た人間が単純だからではないか」、つまり私がどうのこうのということより、A先生から見た私は、そのような存在だったということなのだ。……

第2章 ベルクの『二つの歌曲』にからむエピソード

アルバン・ベルクの作品『二つの歌曲』という作品がありますが、これは、シュトルム（Theodor

Storom) の同じ詩『別離の時に、我が目を閉じよう』に、1900年と1925年に作曲したものをひとまとめにしたものです。つまり、作曲した時期は15才の少年時代と40才の円熟期と隔たっており、作曲技法の上でも、簡潔な調性様式で書かれた前者と12音列を用いて書かれた後者とではずいぶん異なっておりますが、続けて聴いても違和感を感じません。

実は20年ほど前のことだが、作曲科の授業で、色々な曲を鑑賞させた時、この作品を例に上げ、「ベルクという人は、作曲技法の面では年代によって変化がみられるが、彼が追い求めていた世界は終始一貫している。私には彼はずっとロマン主義者であり続けたように思える。彼は変わらなかったともいえるが、変われなかったとも言えるのではないか。それは業のようなものかもしれない。15才でこれだけの曲を書いたベルクは早熟だともいえるが、この前、ヤマハの音楽教育システムで育てられたエリート少年・少女達の作品発表会を聴いたが、作曲技術の面ではもっと多彩であった。10才程度の子供の作品としては、年齢不相応なほど絢爛豪華作曲技法が盛りだくさんに散りばめられており、西洋の名だたる音楽家達を驚嘆させたなどと宣伝していた。確かに、ストラヴィンスキーまがい、あるいはバルトークまがいのものなど色々な技法が取り入れられており、音楽的にもそれなりにまとまっていたが、ただ技法を集めて披露しただけで、精神的な深みなどを感じさせるものは何もなかった。ベルクはそうでないでしょう。この短い曲を聴いただけで、不安と憧れに満ちた彼の繊細な感性の息吹が伝わってくるだろう。作曲家の能力とは、半分は技術だが、半分は感性なのだ。自分の感性で捉えたものを表現するため、より技術を磨くのだともいえる。」このような私の話を、学生達は一応真剣に聞いていたのですが、一人の女子学生が、私が授業で用いた私所蔵のLPを借してくれ、というのです。ほんとうに聴きたいのならいいだろう、と思い、その学生の願いをかなえてあげることにしました。それから数ヶ月後、学生から貸したCDを返してもらい、再生してみると、掠れたひどい音になっているのです。学生のことだから安物の装置で、針圧の高いカートリッジを使って、何回も繰り返して聴いたものだから、LPがすり減ってしまったのでしょうか。おそらく、ベルクの作品に心底共感したからだと思います。卒業後、その学生は結婚し、作曲からは遠ざかったようですが。

第3章 善と悪 ドストエフスキーからの啓示

西洋の人々は、とかく人間の善性、悪性を対極にあるものとして捉えたがるようです。しかし、ドストエフスキーの文学に接していると、善も悪も同じ方向を向いており、わずかなブレによって、善と悪に分かれて行くように見えます。善も悪も人間が生きようとする力、自分の存在を意味あるものにしたいという欲求に根ざしていること。ということは大きな善への志向は、わずかな誤りによって大きな悪に変貌して行く危険性があるということです。

例えば、前回の発表でフランス革命に言及した際、説明したロベスピエールという人は、もともとは『民約論』の著者、「自然に帰れ」を唱えたルソーの思想に深く共鳴した理想主義者であり、暴力の信奉者ではなかったらしいのですが、革命の経緯の中で、恐怖政治を展開する、殺戮者に変貌してし行きます。ヒトラーだって極悪人のように言われていますが、彼が自分の権力欲を充たすためだけに政治を弄ぶ人間だったら、あれだけ多くの人間が彼に追従したでしょうか。彼の心の中に、「栄光に満ちたドイツ国家を築き、貧しい人々をも救済する」という、理念(妄想)があったからこそ、あれだけの力を獲得してしまったのではないのでしょうか。つまり、殺人鬼なら、せいぜい10人くらいの人を殺すのがやっとなのに、正義の人は100万人、1000万人の人を殺すことができるということではないのでしょうか。

8年前、オウム真理教の事件が世の中を騒がせていた頃、一人の親オウム派といわれていた宗教学者が、自分の教え子をオウム真理教に入信させたという疑いから、勤務していた大学を解雇されるというような事件がありました。

彼は、その頃はテレビなどに頻繁に出演していましたので、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、解職後もテレビに出て「自分は、ただこういう酒興団体もあると情報を与えただけで、入信を勧めたわけではない。従って解雇には納得が出来ない」などとボヤいていました。彼の主張の正当性云々は別にして、某ジャーナリストから「貴方はなぜ、あの団体の危険性を見抜けなかったのか」と問われると、「村井(故人)など、オウムの人達と会っていて、表情が非常に穏やかで、澄んだ目をしているので、こういう人が坂本弁護士殺人事件、サリン事件などに関わっているとは

思えなかったというのです。」私は、それを聞いて、宗教学者といいながら。この人は宗教を飯の種にしているだけで、人間の魂の奥底を見とおすだけの、洞察力を持っているのだろうか、疑いました。

では、村井などは、優しい微笑のおくに、残忍な本姓を隠していたのでしょうか。さらに、犯罪に関わったオウムのエリートクラスの人々は、みんな、そのような残忍性を心の奥に、隠しもっていたのでしょうか。

私は、違った解釈をしています。オウムのエリートクラスの人達には、子供の頃は他人に対してやさしく思いやりがあり、いわゆる良い子の典型のような傾向が見られる人が多いようです。

ではなぜ、村井があのように穏やかな顔をしていることが出来たのでしょうか、私は、彼に罪の意識が無かったからではないかと思えます。浅原と出会い修行する前なら、小さな子供まで含めて弁護士一家を殺害するなど、罪の意識にかられ、とても、出来なかったでしょう。しかし、悩んだ末、浅原が「坂本一家殺害はより高い魂に導くためのポアであり、それは通常の殺人行為ではない。」といえ、何の疑いも抱かず信じ切ること。つまり、自分の自我を抹殺し、迷いを捨て、浅原の意志をそのまま、自分の意志として受け入れることこそ、魂をより高みに導く解脱への道なのだ、信じて行動したからこそ、達成感こそあれ、罪の意識を抱くことなく、あのような表情を持続することが出来たのではないのでしょうか。

そこにカルトの怖さが示されていると思えます。良くも悪くも彼らだって遊び半分でその団体に所属していた訳でなく、財産も社会的地位も捨てて出家したのですから、それだけの覚悟があつてのことです。宗教を飯の種にしているだけの凡学者には、彼らの心の奥にあるものの一部でさえ見通せなかったのではないのでしょうか。

7) 舞踊と音楽の新作に挑む 第一章

～なぜ『火の鳥』を新作の素材として選んだか～

中島 洋一

舞踊と音楽の新作について

2004年2月、東京芸術劇場での公演を目指し、舞踊家諸氏と新作を共同制作することになりました。それは、国立音楽大学における中島研究プロジェクトの研究活動として推し進めて行く予定です。

当初の参加メンバーは、舞踊の芙二三枝子、井上恵美子、馬場ひかり、声楽の秋山理恵、ライブラリー担当として、道下京子、それに私の6人ですが、声楽の秋山氏は、ある程度制作が進んでから、加わってもらうこととし、当初は秋山氏を除く5人で、制作に向けての検討を始めることにしました。

私は、漫画家：手塚治虫のライフワークであり、12巻からなら未完の大作『火の鳥』の第1巻《黎明編》、第2巻《未来編》を素材とし、それを舞踊と音楽による舞台作品向けに、大幅に手を加えて作品の下敷きとすることを提案しています。

しかし、それはまだ決定という訳ではなく、より、強力な案が出てくれば、変更の可能性も残されています。【～なぜ『火の鳥』を新作の素材として選んだか～】は、私が『火の鳥』を素材として選んだ理由について、他のメンバーの方々に趣旨説明をするために書いた文章です。

この文章を公開した理由は、今後我々のプロジェクトの活動内容について、逐一【舞踊と電子音楽のホームページ】で、公開して行く予定であり、この文章の発表をその第一弾としたいと考えたからです。

我々のプロジェクトは新しい総合芸術の創作研究プロジェクトであり、創作にたる手順まで含め、いろいろ見直しを行おうと考えております。作品の制作過程公開に踏み切ろうとしているのも、そのような思いがあつてのことです。

もちろん、企業秘密ともいえる部分もあり、すべてを公開とする訳にはまいりませんが、可能な

限り、開いたあり方で作業を進めて行く予定です。

~なぜ『火の鳥』を新作の素材として選んだか~

手塚治虫と私

以前、『音楽の世界』2002年6月号の巻頭論文でも書いたように、私は小学校の3~5年の頃はかなりの読書少年で、科学関係の本や、童話の本などを読み漁ったものでした。それが、小学校5年の冬に実母を病気で失った後は、青白い読書好きの子供から、真っ黒になって外で遊ぶアウトドア少年にと生活態度を一変させ、本をあまり読まなくなりましたが、それでも小学校6年~中学3年の時期にマンガだけは、友達同士で貸し借りし合って随分読みました。多くの漫画本はお菓子を食べながら笑い飛ばして読むようなものが多かったのですが、そういう中でこの人の作品だけは違うと感じ、のめり込むように読んだのが手塚治虫の作品でした。

私が彼の作品をむさぼるように読んだのは1950年代で、特に53~57年頃でしたが、氏自身の回想記を読むと、その当時は大人気柔道漫画だった『イガグリ』君の作者、福井英一氏や、その他の先輩および同世代の漫画家達に対して強いライバル意識を燃やしていたようです。当時の私は気がつかなかったのですが、50年代は手塚氏がまだ世に出たばかりで、成功して行く途上の時期だったのでしょう。しかし、私自身の心の中におけるランク付けでは、手塚氏の作品は、他の案画家の作品と比べ、内容的に一段も二段も高い別格の作品として受け止めていました。

手塚氏の漫画の特徴として、一般に当時誰も扱わなかったSF的題材を用いた作品が多いこと、映画、アニメーションに通ずる動的な絵の描き方などがあげられますが、SF的題材を扱った作品が多いのは、少年時代から科学少年であり、大阪大学医学部出身で医学博士でもあり、当時の一般の漫画家達とは比べものにならないほど科学的知識が豊富で、ちゃんとしたSF漫画を描ける唯一の漫画家ということで、従って雑誌社からの依頼もSFを題材にしたものが多かったからだと思いますが、ほんとうのところ、手塚氏はSFだけでなく、時代物、西部劇、戦争ものなど、色々な題材で描いています。

なぜ彼の漫画だけが強く心に残ったのかということですが、強いて言えば一般的な少年漫画に比べ、人間の描き方に大きな違いがあるからだと思います。

ここで、多分中学生の頃、読んだものと思われる一つの作品を例に私の記憶をたどり概略を記してみます。おそらく、この作品は私も愛読し、今でも初期の傑作として出版されている『大洪水時代』、『黒い宇宙線』、『宇宙空港』、『緑の猫』などと、ほぼ同時期の作品と思われる。

記憶を辿って思い起こした少年時代に読んだ一作品について

物語は二つの国、多分日本と米国が戦争状態にあった時代の話です。米国にもの凄い空軍兵士がいて、彼が操縦するZという戦闘機は『Zの辞書に不可能の文字は無い』と豪語しながら、ことごとく日本軍の戦闘機を撃ち落としてしまいます。なんとかしなければならぬとの日本軍の考えを受け、それに立ち向かったのが鮫島少尉(仮称)でした。鮫島少尉は勇敢にもZ戦闘機を追いつめ、射撃しますが、彼の操縦機も射撃され、二機とも破損し無人島に不時着します。お互いに敵である、Zの操縦者レオン(仮称)と、鮫島は、最初はいがみ合います。鮫島が鳥を撃ち落とし食料としてレオンに差し出すと、レオンはこれは不味いことで有名な鳥の肉だ、こんなものが食えるか!と拒否します。鮫島は意地を張って[食えるよ]と行って、吐き出しそうになるのをこらえながら食います。しかし、無人島で二人で協力しあって生活して行くうちに、次第に心のわだかまりも融けて行き、やがて二人は強い友情で結ばれるようになります。二人は『もう二度と戦場には立たない』ということ誓い合います。

それから、大分たたった頃、船が近くを通り、二人は助けられ、それぞれの国に帰国します。

帰国後しばらくして、『Zという戦闘機がまた現れ、日本機をことごとく撃ち落としている』という噂を耳にします。彼はそれがレオンの仕業だということをしぐ認識し[あれほど不戦を誓い合

ったのに」と思いつつも、レオンを迎撃することを決意し、飛び立ちます。

とうとうZ機と戦いを交え、Z機を撃ち落とします。レオンは「さようなら！」と寂しくつぶやきながら落ちて行きます。落ちて行くレオンを見守りながら鮫島は「ばか、ばか、ばか！」という言葉に浴びせ、泣き叫びます。

この作品は手塚の代表作ではないかもしれませんが、手塚の特長がよく出ていると思います。通常の少年向漫画では人間の描き方がもっと平面的で、例えば悪に立ち向かう英雄的熱血少年を主人公にした漫画なら、善玉、悪玉がはっきりしており、読者は自分を善玉の主人公と同化させることで、悪玉を倒す快感に浸りながら気楽に安心して読めるのですが、手塚は人間がもつ弱さ、不完全性、悲しさ、醜さといった要素から、美しさ、けなげさといったものまで、立体的に捉え、そして、絵とストーリーの力を通して、子供達に対して「人間よ、こうあってくれるな、こうあってくれ」と、強く訴えかけてくるのです。

これは良質な文学作品などに多く見られる特徴と重なります。

話を火の鳥に戻しますが、ヒナクをいとおしみながらも、卑弥呼の臣下として忠実にスパイ役をはたし人邪馬台国の軍を手引きし、結果として軍がヒナクの村、クマソの人々を皆殺しにするのを手助けしてしまうグズリの悩み。自分が信じていたグズリの手引きによって、同胞達を皆殺しにされたヒナクの絶望と悲しみ、それをこえ、グズリを受け入れるか否か、悩むヒナクの葛藤、集団と個人の狭間で悩み揺れる人間の心、さきほどの漫画のレオンと鮫島少尉との物語とつながるものはありませんか。

手塚治虫の『ガラスの地球を救え』について

火の鳥は作品の中では、コスモゾーン（宇宙生命）の化身として描かれています。星や原子を生命として定義できるかは別として、原子を形成している素粒子から数千億個の星の集まりである銀河、その銀河が数千億個集まって形成されている大宇宙まで、不変なものではなく、すべてが変化し続けている、というのが現在の科学で捉えた宇宙像です。

宇宙規模で見れば一つ一つの銀河だってゴミのゴミみみたいな存在ですし、太陽の2000億倍の質量を持つといわれる我々の銀河の中で、太陽系の存在なんぞゴミの中のゴミみみたいなもので、その中の一つの惑星でしかない我々地球なんて、そのゴミにくっついているさらに小さなゴミみみたいなものに過ぎぬかもしれません。

しかし、我々人間はそのゴミの点の中に生きるちっぽけな生き物にすぎません。

手塚治虫には、21世紀に向けて少年達に呼びかけた『ガラスの地球を救え 二十一世紀の君たちへ』というエッセイがあります。

地球を美しいがガラスのように脆く壊れやすい存在と捉え、それを守る必要性を彼自身の作品を通して、しばしば訴えております。また手塚氏と共通の視点に立ち、地球環境の保全を訴える、多くの科学者や市民が存在することは周知の通りです。

では、意地悪く、手塚氏とまったく違った視点に立って、地球環境と生命の問題をみつめてみましょう。

地球は脆いどころか強靱な存在である。（手塚治虫の説に対する逆説）

～人間はちっぽけな生物の一品種にすぎず、自然環境を破壊する能力など無い～

現行の人類のようにヒト科、ヒト族、つまり一科、単一種の生物がこれほど繁栄したことは地球の生物史においてなかったにしろ、同系統の生物が大繁栄したことは、かつての恐竜時代がそうだったように、何度もあります。人間であるということから離れ、地球外生物の眼で人類がはびこる状況を見れば、それは単なる特定生物の異常繁殖と映るのではないかと思います。人間も生物の一種ですから、人間の存在がもたらした環境変化も、異常繁殖した蟻が、沢山の蟻塚をニョキニョキつくるようなもので、自然現象の一つとして捉えられるでしょう。

例をあげてみましょう。炭酸ガスの増加に伴う温暖化による地球環境の変化が心配されておりま

すが、現在の地球の大気に占める炭酸ガスの割合は、350PPM つまり 0.035%程度です。金星では 96.5%にもおおよび、しかも太陽に近く大気の密度も地球よりずっと高いので、温室効果と太陽との距離が近いことから、大地は 400度といった高温状態にあり、地球型生命は住めません。

地球の大気において炭酸ガスの割合が低いのは、炭素の多くが、石炭、石油などの化石燃料、植物動物などの生物の体として蓄えられ、空気中に存在する CO₂ が少なくなっているからです。40～45億年前の創世記の地球においては大気の成分は CO₂ 95%で、酸素は気体としては存在しなかったのです。もちろん、気体酸素 (O₂) がないので宇宙線を遮るオゾン (O₃) 層などありません。そういう環境の中で原始の生命が誕生したのです。従って原始の生命は酸素があるところでは生きられない嫌気性の生物だったのです。やがて、光合成を行う植物などの出現で、生物などの有機物として蓄えられる炭素が増え、CO₂ が減り、近年までは、光合成などで吸収されてゆく CO₂ の量と、大気として吐き出される CO₂ の量が均衡し、そういう循環の中で今の地球環境が維持されて来たということです。

ところが近年になり人間は、化石燃料である石油、石炭を掘り出し、燃焼させることで大気中の CO₂ を増やし、その一方、森林などを伐採して、植物の光合成を行う能力を削いでいるので、かつての均衡を保った循環が崩れ、空気中の CO₂ が増え、その人為的環境変化がもたらす温室効果により、地球が温暖化している、ということで問題になっているのです。

では、温暖化したらどうなるかということ、わかりやすい例をあげると30年くらい前に読んだ科学の本では、南極の氷が全部溶けると地球上の海水面は70M上昇すると書いてありました。それが事実とすると、10%融ければ7m上昇することになり、例えば低地が多いオランダなどは国土の多くが海に埋もれてしまうことになります。ですからヨーロッパの国々は環境問題に対しては非常に神経質です。

では、地質学的にみて海水面は変動しなかったかということそうではなく、地球は100万年前から氷河時代に入りましたが、2万年前のウル氷河期にはグリーンランドは勿論、北米大陸の半分は氷床に覆われ、海水面は今より130mも低かったらしいのです。また、氷河期が終わった後、後氷期（あるいは間氷期かもしれません）が続いている訳ですが、その中でも6000～4000年前あたりは、現在よりも大分暖かい時期があったようで、最近、縄文時代の巨大集落遺跡として話題になった青森県の三内丸山遺跡はその頃栄えたのですが、巨大集落を可能にした理由は、暖帯性植物である栗を大栽培し、食料の増産に成功したかららしいのです。しかし、4000年前あたり以降は気温が下がり、栗の大量栽培が出来なくなり集落は衰退したらしいのです。

2万年といえば地球の歴史からみればほんの一瞬ですが、その間に100m以上も海水面が上下したということですから、人間の力によらない自然のもたらす変化も、結構大きいのです。

もちろん、温暖化だけではなく、オゾン層の破壊、ダイオキシンなど有害な成分の増加など色々な問題があります。

ここで、逆説的に、人間の力でどれくらい、自然を環境を破壊できるか、考えてみましょう。世界中の森を伐採し、石油、石炭をどんどん燃したとしても、CO₂ を1%にする力も人間にはないでしょう。木を切り倒しても、草は生えますし、海草類や植物性プランクトンの発生もあります。たとえ、すべての草を除草剤を使って枯らそうと試みたとしても、それを行うだけの人的、物的資源はないでしょうし、そうしたとしても今度は除草剤に対して耐久力のある植物が生えてくるでしょう。たとえ核戦争が起こったとして、人類のすべてが一瞬で滅びることはないでしょうし、たとえ生き残った人間が精神的に荒廃し、殺戮を繰り返すか、あるいは生き続けることに意義を見いだせなくなり人類が滅亡してしまったとしても、新しい環境に適応した他の生物が人間にとって代わって繁栄するでしょう。

さらに、もっと過激な逆説を唱えると、最初の嫌気性の原始生命が生まれた酸素もオゾン層もない原始の地球環境を基準に考えれば、酸素とオゾン層がある通常の生物環境の方が汚染された状態であり、わずかなりとも炭酸ガスを増やし、オゾン層を破壊する現在の人間活動は、環境を元に戻すことにいくらかでも貢献している、などという皮肉な見方だって出来るのです。

また、宇宙規模で見ると、20世紀の後半以降、人類が手に入れ、核爆弾などとして使うことが可能になった核のエネルギーなど、太陽などの恒星が自らの本体である水素をヘリウムに換えることで継続的に行っている自然の核融合反応がもたらすエネルギーに比べれば、ほんとに小さく微々たるものです。人類滅亡の後、どのような生命が繁栄するかは判りませんが、宇宙における平凡な

星の一つである太陽が、ゆっくり核融合活動をすすめて、50億年後くらいで、水素の多くを消費し赤色巨星として、地球の軌道を包みこむまでに膨張するまで、生物の営みは続くのではないかと思います。赤色巨星化した太陽が地球の軌道を包み込む時は、低温といっても3000度以上ですから、ほとんどすべての生命は蒸発してしまうでしょう。

それは、数十億年の遙か遠い先の話です。もし、近未来において太陽が赤色巨星化すれば（こんなことは科学的には絶対にありえませんが）、人類は火星移住などということも考えるかもしれません・・・

しかし、『ガラスの地球という』とらえ方は、やはり共感できる

人類も自然の一部であり人類の生活圏拡大による自然破壊も一種の自然現象である、という考え方にたてば自然破壊など存在しないし、またその程度のことで地球はびくともしないことも事実でしょう。

では、なぜ、『壊れやすく美しいガラスの地球』というとらえ方が存在するのでしょうか。それは、人類が、現存する鳥類や獣類、森や林と共存しながら生き続けることを可能にしている今の環境を維持するということを前提としたとき、はじめて、そういうとらえ方をする必要が出てくるのです。

我々、そして私は人間であり、宇宙も、世界も人間の意識を通してはじめて存在するのです。『人類が滅びようと存続しようと、どちらにしろどうってことはない自然現象に過ぎぬ。どちらでもいい』というのは、人間ではない視点に立った捉え方です。我々は人間である以上、『人としていかに生きるべきか』という考から抜け出せないでしょう。世界中の文化圏、人種がみな宗教をもっているのは、人間が『人は何か、自然とは何か、宇宙とは何か。人は自然、宇宙の中で如何に生きべきか』を真摯に探求し続けてきたことの証ではないでしょうか。

手塚氏の宇宙観は、[万物の中で人間が一番偉い]と思いが上がった『人間中心主義』を越えようとしているかのようにみえますが、しかし、やはり、非常に人間主義的なものです。それは、人類が心身共によりよい人間生活を維持して行くためには、人類は奢ることなく、他の生物達となかよく共存してゆく道をさぐって行かなければならない、ということだと思います。鳥や獣たちにとって住みにくい環境は、人間にとっても住みやすい環境ではないのです。SF作家と思われている彼が、科学技術の未来に対してどちらかという悲観的な見方をしがちなのは、科学技術の進歩に人間の精神の成長が追いついていないのではないかと、そうだとすると人間の未来は明るくない、というような疑念を強く抱いているからだと思います。

火の鳥の目

～人間的な、あまりに人間的な～

「人間は残忍で、ウソツキで、嫉妬深く、人を信用せず、浮気者で、派手好きで、同じ仲間なのに虐殺し合う-----醜い動物です。しかし、それでも、なお、やはり、ぼくは人間がいとおいしい。生き物すべてがいとおいしい。手塚治虫『ガラスの地球を救え』より」

手塚治虫は宇宙的大作『火の鳥』を小さな天体でしかない地球、それでも45億年続いた地球の歴史のうち、卑弥呼の時代から紀元3400年のわずか3000年あまりの有史時代のみを範囲として書き下ろしているのも、『ぼくは人間がいとおいしい』という思いが強くあるからです。

つまり、それは作中で宇宙生命（超越者）の化身として登場する火の鳥の目であり、そこに手塚氏の思いがこめられていると思います。

火の鳥は、憎めない人柄ながら卑弥呼の命を受けクマソを皆殺しにする猿田彦、ヒナクを愛しながら、邪馬台の軍を手引きするグズリに対しては同情を抱きながらも悲しいまなざしで、自分の力で岸壁を上りきろうとするタケルに対しては、慈愛と励ましを込めたまなざしで、自分との約束を守り新人類誕生まで30億年間見守ったマサト、そして30億年待って結び合ったマサトとタマミの愛に対して、いとおいしい思いを込めたやさしいまなざしで見守っているのではないのでしょうか。

なぜ『火の鳥』を題材に選んだか

ここまで来て、あえて念を推す必要はないでしょうが、まず手塚治虫は、わたしの少年時代、私の心を強く捕らえ揺さぶった作家であること。ですから、チャンスがあったら一度はこの作家の作品を題材にして作品を手がけたいと考えておりました。

もちろん創作の動機として手塚作品に触発されたということが強くあったとしても、新しい作品として創造するかぎり、漫画『火の鳥』を下敷きにしたとしても、我々の目で捉え直し再構成したものを作るといことは構わないと思います。

それと、第二の理由は、漫画作品は小説などと違って、多くを絵で表現するため、言葉による説明も舞台設定も比較すると明快で単純なことが多いのですが、それだけにイメージを膨らませることで象徴的表現が可能になり、より広い表現力を生み出し得るということです。

例えば、小説ならば卑弥呼の時代のことを書けば、書き方にもよりますが、内容がその時代の物語、人間に限定されやすいのですが、舞踊と音楽という抽象化された舞台芸術として表現することで、表現の深さ、的確さが伴えば、クマソと邪馬台の戦いも、観客にあまたの人間集団同志の争いを象徴的に表現したものと捉えさせ、それにより、例えばイスラエルとパレスチナの争いなどまで連想させることが可能になるかもしれません。

もちろん、必要に応じて言葉を使うことも厭いませんが、簡潔な題材でありながら、人の心、行為の闇と光りを深く捉え、『命とは何か』、『人間の生きる意味とは何か』という、重い問いを含んだ内容を、音と視覚の芸術手段を用いて、深く強い表現をもたらすまで作品を練り上げて行くことは、難しことではでしょうけど、その目的のために『火の鳥』は相応しい素材と考えます。

2003/8/28 記 9/15 改訂

8) 上海にて譚盾の新作・チェロ協奏曲を聴く 小山内めぐみ

8月30日、上海大劇院・大ホールにて、譚盾(タン・デュン)のアジア初演のチェロ協奏曲(『チェロとビデオとオーケストラのためのチェロ協奏曲 地図～尋回消失中の根籟』)を聴いた。

この音楽会は、“上海大劇院成立5周年”の記念行事の一つ。1週間に渡り、海外で活躍中の中国人音楽家達に、「中国文化のルーツを源泉にした創作活動」というテーマに相応しい作品を発表させたもの。

譚盾自ら上海交響楽団を指揮した、この日の演奏会では、他に、ショスタコーヴィッチの「ロシア民謡による交響的序曲」と、バルトークの「ルーマニア舞曲」が組まれていた。各演奏前に、譚盾はステージで自ら解説し、現代における民族固有文化の意味を熱く語り、プログラミングの意図を訴えた。

さて、チェロ独奏にアンシー・カートネン(フランス)を迎え、始まった『チェロ協奏曲 地図』は、間断なく続いて演奏される10の部分から成る。「1, 儼戲与哭唱」は、物悲しい遠吠えのような管の音で始まり、チェロが低音で旋律を引き継ぐと間もなく、道教の鬼やらいの儀式のビデオ画面がオケの後方に大きく映し出され、音楽は道教一色となる。さらに、一瞬、老婆達が愛娘を嫁がせる悲しさを泣いて訴える儀式の場面が変わり、チェロ独奏が重なる。「2, 吹木葉」は、日本でも馴染みの草を口に銜えて笛のように吹く音楽とその演奏姿のビデオ画面。草の独特の響きとチェロの合奏が妙味を出す。「3, 打溜子」は、うってかわり、激しく打楽器を打ち合う掛け合いの儀式の画面と音楽。このリズムカルでノリのいい音楽に続いて「4, 苗哨响」が、独特の細長いラップで華々しく奏でる場面と音楽で受け、盛り上がった所で、また「5, 飛歌」はうってかわり、少数民族の衣装を纏った少女が歌う場面と、彼女の

りのある独特の歌声と、チェロの物悲しい旋律で、実にしっとりした味わい。「6, 間奏曲 聴音尋路」には、譚盾が採取した民俗音楽は聴こえない。この部分を聴いていて連想したのが譚盾の初期の作品『死と火 パウル・クレーとの対話』だった。

つまり、彼はこの間奏曲において、自己の音楽のルーツを求める姿そのものを表現したのだろう。

「7,石鼓」は、そうして辿り着いた音楽の一つの形、いまや、譚盾特有の様式とも言える、例の石を使った音楽。さらに「8,舌歌」は少数民族の少女達が舌先を振動させて独特の歌を奏でる場面と音楽。まるで童謡のように聴こえる旋律と少女達のあどけなさが、かえって胸を詰まらせる。聴きつつ、私はつくづく感じざるを得なかった。我々人類は、これまでに、何と多くの貴い優れた大切な文化を失ってきたことだろうか。我々は、その失われたものの価値を取り戻すことができるのか？

果たして、我々が進んでいるこの方向は正しいものなのか？ かく切々と訴えているかのように指揮する譚盾の背中が、痛々しいくらいに見える。だから「9,竹」の物悲しい旋律は、我々に、人類が抱えている様々な現実の問題や、負の遺産を思い起こさせ、漠然とした不安を掻き立てる音楽と言えなくもない。ところが、「10,蘆笙」は、日本人もお馴染みの笙の音色が大変力強く奏でられる場面と音楽。オケ奏者の掛け声と元気で明るい打楽器で締めくくられた最後は、未来に希望を抱いて進めと応援しているかのようだ。

譚盾の作品は、いつも、人類が見捨ててきた古い価値ある文化の存在と、人類が直面している今の有様を、私に痛感させる。と同時に、さらに、未来へ挑むエネルギーと自信を与えてくれる。譚盾は、この作品によって、彼なりの(失われたものを辿る)「地図」を示してくれた。多くの聴衆が、それぞれの立場の「地図」を探るきっかけを得ることができただろう。

上海大劇院は実にゴージャスな建物だが(このゴージャスさに匹敵する、今の日本のホールを、私は知らない)、ホールの音響も実に素晴らしい。ホール設立記念行事の音楽祭がかくも中身の濃い演奏会であったなら、その目的は立派に果たされたと言えるだろう。我々日本人は、こうした近隣の音楽界の実態を知っておくべきではないか。現在の日本において、「日本文化のルーツを源泉にした創作活動」というテーマのもとに音楽祭を催したら、私を惹きつける作品を生み出し得る現代作曲家なんて、果たして存在するだろうか.....。

2003/9/8 小山内めぐみ

+++++

9) コンサート評 ~ 最近の日本の現代音楽 ~ 西 耕一

「早春さわやかコンサート」

池辺晋一郎《3、776メートルの年代記～オーケストラのために》初演

2003年3月11日、東京オペラシティにて池辺晋一郎の《3、776メートルの年代記～オーケストラのために》が初演された。演奏は現田茂夫指揮の東京交響楽団。この作品は毎日新聞社の「富士山再生キャンペーン」のために同新聞社が委嘱したものである。事前に新聞で発表されたインタビューでは「親しみやすい曲」とあったので、筆者はそういった傾向の期待も少し持って会場に向かった。曲は冒頭で低音楽器中心のマグマが湧き上がり富士が形成されて行く様を描写した部分に、久しぶりに交響曲第6番までの力強い池辺が聴けた。心臓の鼓動のような大太鼓のリズムに合わせたオケの行進は逞しい富士の相貌を思わせるものだった。中盤の弦楽中心の息の長いパッセージで緊張感を誘う部分などはいつもの池辺流。そして、定形の終結により曲は終わった。

曲については少し残念だったものの、不満をいうほどではなかった。けれども、曲が演奏される前に池辺氏と司会(どこの所属かはハッキリわからず)の曲紹介には非常に憤りを覚えた。

何に不満だったかという司会者の「現代音楽という私達には非常にとっつきにくい、池辺先生の曲は別」なる発言。いまだにそんな事を口にする司会者と、そういう発言をする司会者を起用した毎日新聞社に情けない思いだった。「ジャーナリズムに必要な公平さ」を忘れ、「現代音楽=難解」という偏見を公衆の面前で喧伝し、他者を貶め自己を持ち上げる。「池辺先生の曲は別」ならば、その根拠を現代音楽と池辺作品と比べて語って欲しかった。池辺氏ご自身の曲解説は洒落も交え、楽器の紹介など多岐に渡り良い内容ただけに残念だ。

そしてもう一つ。この曲は去年の秋に委嘱が行ったらしく、池辺氏は無理して予定をつめて作曲したらしい。多くみて半年で、どう考えても1年以上前からの仕事で手一杯と思われるような人間に作曲させる。本当に良い作品を作って欲しいと考えていたら、もう少し余裕を持って委嘱するだろうと考えるのは、この仕事をマニアックに知っている者だけの意見だろうか。

現代音楽を取り巻く無理解を強く意識した一晩だった。

2003年4月29日(火・祝) 午後4時半開場、5時開演
Bunkamura オーチャードホール
「NO TO WAR / 音楽家たちの平和セッション4・29」

開演5時、終演9時10分という長大な会であった。コンサート企画から約20日で二千枚のチケット完売、三百人がチケットを買えなかったという盛況のコンサート。演奏家の方も参加者は交通費など、すべてボランティアとの事である。

林光氏の司会によりコンサートが進められる形式で、ジャズからロック、邦楽、クラシックまで幅広いジャンルから参加者が集っていた。演奏はほとんどがリハーサル無しのような状態で臨んでいるらしく、全体的にあまり良くなかった。その中では喜納昌吉の「花」と、田村拓男指揮の日本音楽集団による《子供のための組曲》は、しっかりと聴衆の心を捉えるものだった。喜納の歌唱は心の底から湧き上がるような思いが込められていた熱演だったし、日本音楽集団の演奏は乱れの無いアンサンブルで音楽家のプロフェッショナルな仕事を示していた。筆者の周りの反応からすると日本音楽集団をはじめ聴くような、普段はポピュラーしか聴かないと思われると推測されるような聴衆にも頗る評判がよかったようだ。

特筆すべきは、反核日本の作曲家が多く参加している音楽会の中で、喜納昌吉は演奏後の話でたった一人、イラクだけでなく北朝鮮にも触れて世界平和を唱えていた。演奏会の賛同者として名前だけ貸して演奏会では姿を見なかった、人間が多い中、喜納の言動は非常に意味があったと思う。

なお、筆者がこの演奏会で目当てにしていた黛敏郎作曲《シロフォン・コンチェルティーノ》は第2、第3楽章のみのカット演奏で、第3楽章は各パートがバラバラで揃わないという哀しい気持ちになるものだった。指揮は本名徹次、オケは即席の平和セッション4・29オーケストラ。

陸上自衛隊中央音楽隊第52回定期演奏会、一柳慧の《ナグスヘッドの追憶》初演

2003年6月15日、東京芸術劇場で陸上自衛隊中央音楽隊第52回定期演奏会が行われた。注目されたのは一柳慧への委嘱であった。

一柳慧はじめての吹奏楽作品となる《ナグスヘッドの追憶》は、1967年、一柳慧が画家のジャスパール・ジョーンズと一緒に訪問したナグスヘッド(ライト兄弟が初飛行をした場所)の追憶に作られた作品。演奏会のプログラムには上記のほかに、今年がライト兄弟の初飛行100周年であることも、この曲を作った要因の一つとして書かれていた。

作品は、冒頭でオケの絡み合いをひとしきりしてから、延々とクラリネットにソロを演奏させ、その後、コントラバスへなどへ渡して行く前半は非常に緊張感を強いる。それから、迫る足音のようなティンパニの拍に合わせ、オケが音形を繰り返し、打楽器を増やして音量を上げて行き爆発の中盤。つけ足たような後奏で終了という構成であった。

それでも、筆者は前半のテンションと中盤のカタルシスは充分期待を上回っていて満足であった。が、近くに座っていた一般の観客は露骨に嫌な表情をし、鑑賞を止めて耳を閉ざしているような表情で音楽に反応していた。筆者は今回の一柳作品は、現代の作品の中でもわかりやすい部類に分けられると考えるし、普遍的な音楽としてのカタルシスも持っていたと思う。しかし、聴衆の現代音楽

へのアレルギーは想像以上に根深いようだ。少し慣れてしまえばなんという事も無い音がアレルギーを誘発してしまうとそれ以降の良質な音楽さえ拒否されてしまう。現代音楽を鑑賞して貰う事の難しさを再認識する演奏会であった。

なお、同演奏会で演奏された J・ウィリアムズ作曲《雅の鐘》G.ホルスト《吹奏楽のための第2組曲》D・ブージョワ《コッツウオールド・シンフォニー》は、聴衆のアレルギーを誘発せず、万雷の拍手で称えられていた。

オーラ「共楽の和」

2003年6月17日火曜日は、津田ホールで邦楽合奏団オーラの「共楽の和」があった。松尾祐孝、佐藤容子、毛利蔵人、吉松隆、池英篤、マーティン・リーガン、三木稔らの作品が演奏された。第1部は現代系の松尾、毛利の作品と、クッションとなる佐藤、吉松作品が、第2部には池英篤の中国笛による楽器紹介を兼ねたショーに近くエンターテインメント性の高い演奏を挟んで、後半にマーティンと三木の作品が演奏された。特に印象深かったのは、今回の演奏会が初演となったマーティン・リーガンの《アルケリಂಗ～時の始まり～》と三木稔の箏協奏曲第4番《松の協奏曲》であった。

マーティンの《アルケリಂಗ～時の始まり～》はオーストラリアのアボリジニのドリームタイムにより、宇宙創造から人類の営みまでを描いた作品。マーティンの音楽は師の三木稔譲りの抒情性を持ち均整の取れたもので、筆者が前回聴いたマーティンの作品からは数段の進歩があった。曲の構成は尺八奏者を除く、馬頭琴、二十絃箏、十七弦箏、三味線、打楽器による時の始まりを表現した前半と、尺八の登場から人類の営みの中間、そして、二人の尺八奏者が、演奏しながら舞台を歩き、それぞれが上手と下手へ消えてゆく後半に分かれていた。特に、男女を暗喩する二人の尺八奏者がホールの舞台とは正反対の客席で入り口となる扉側から登場し、客席へ吹きかける息吹は、尺八の音色の奥深さをさらに引き立て、深遠さを増すアイデアであった。また、馬頭琴の豊かな音色を活かすソロも聴き所もあった。しかし、筆者が考えるに、後半の尺八奏者を舞台上で歩かせる部分はアイデアに偏り、音楽の流れが途切れている様であった。より一層の発展が望まれる作曲家である。

三木稔の《松の協奏曲》は、1984年の作品で、この曲のソロ部分は二十絃箏の独奏曲《ラブソディ》として海外のレーベルからCD化もされている。しかし、完全版となる邦楽器の合奏(十三絃、2、十七絃、1 三味線、1)と二十絃箏のヴァージョンはCDもなく、この演奏会が久しぶりの日本再演であった。筆者は、曲が始まってすぐにこの作品にあまり期待をしていなかったのを悔いた。それほど瑞々しい二十絃箏の独奏であった。二十絃箏以外の楽器が入ってきて曲が展開されるにしたがって、たおやかに歌いながら自然破壊への哀歌や対抗を訴える声を表現したアンサンブルは特徴的な旋律とリズムで聴く者へ迫ってきた。後半は二十絃箏によるたおやかな歌の旋律がオスティナートされ、強烈なアツチレランドに至る。フィナーレは狂熱的終結ではなく、あくまで自己を失わない制御されたアンサンブルであったのは作曲者の意図であったのだろうか。全ての楽器が荒れた音を出さずに優しい瑞々しさを忘れない音であったのもこの曲を佳曲に仕上げている。二十絃箏の木村玲子のソロも見逃せない。斬新さからは少し距離を置くかもしれないが、普遍的な音楽としての親しみ易さや無駄のない芸術性は、紛れもない三木稔の傑作のひとつとして数えられるだろう。この作品のCD化が待たれる。

今井重幸の作品初演や「ニューかぐら」など、オーラは何があるか判らない。真に目が離せない団体である。

<http://www.ora-j.com/>

「現代日本のオーケストラ音楽第27回」

2003年7月23日は東京文化会館大ホールで、毎年恒例の日本交響楽振興財団による作曲コンクールである「現代日本のオーケストラ音楽第27回」があった。
コンクールへの応募者は10人という低迷振りで、審査員は10人であった。
ノミネートと同義である日本交響楽振興財団奨励賞は森田泰之進《The Metallic Birds》塚本一実《「道」オーケストラのために》中川善裕《「Scutum」 for Orchestra》森田佳代子《“蒼穹の闇” for Orchestra》の4名。その中で森田泰之進《The Metallic Birds》が最上位入選を果たし、日本財団特別奨励賞を授与された。演奏は東京フィルハーモニー交響楽団、指揮は小松一彦。招待作品として、武満徹の《リヴァラン》も演奏された。ピアノは小川典子。

この演奏会については、個々の批評よりも大きな問題について述べたい。これは作曲コンクールに良くある話ではあるが、どの作品も、自分の語法が無い。師匠や、好きな作家からの借り物であること。否、劣化コピーでしかない。芸大、桐朋アカデミズムの延長でしかない。そういった状況が、「現代日本のオーケストラ音楽」演奏会でここ数年続いている。

具体的に云うと無駄な音が多い。無駄に打楽器を鳴らし、無駄に管楽器を鳴らし、無駄を無駄で繋いでいく。その上、「自分」がない。語法が古くても、無駄があっても作家の心から湧き上がるものがあれば、それだけでも輝きを発する筈なのに。

真の創作とは何だろう。芸術の進歩を期待し、それを伸ばして行くためには、学校で習った技術を審査するのではなく、独創性、オリジナリティをこそ評価するべきではないか？ 学校の教師を選ぶならコンクールでなく学校各自で採用試験を行えば良いだけの話である。

若き日の武満、黛、團、一柳、三善、は誰の借り物でもない、独創性を持っていた。そんな作曲家を探すのがコンクールを有効に成り立たせるはずだ。

このコンクールの今年度の応募者がたった10人という状況も、上記のような異常さを感じ取っての事だろう。審査料金の二万円も疑問である。演奏すべき価値もない作品を候補にするくらいならば、審査料金を無料にして広く応募を奨励するべきでないか。「二万円の審査料金を払える」という条件は「良い音楽を書く」人間に必要な条件だろうか？

審査員にも、中堅の作曲家や評論家を取り入れたりするべきではないか？ 新しい才能の発掘にはそれを感じ取れる、比較的若い頭脳も必要な筈だ。審査員のほとんどが70歳以上というのも異常な事態ではないか。さらにいえば、女性の目だって必要だ。女性の審査員は一人もいない。国際的な視点として、日本人以外の目だって欲しい。

本当に日本の芸術振興を考えるならば、今回の応募者10人は、無言の問題提起と受け取るべきではないか？ このコンクールも25年を向かえ改革を迫られるべき時期に来ているのではないかと思う。次回のコンクールで、何かしらの変革があることを希望したい。

10) 音楽会評

畑山千恵子

A) 迫昭嘉 ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲ツィクルス 第7回

2001年11月から行われた迫昭嘉のベートーヴェン・ピアノソナタ全曲ツィクルスもいよいよ大詰めを迎えた。今回は第8番、作品13、八短調「悲愴」、第12番、作品26、変イ長調「葬送」、第18番、作品31-3、変ホ長調、第31番、作品110、変イ長調が演奏された。

まず、第 8 番「悲愴」。第 1 楽章の序奏から聴き手をひきつけていく。ドラマトゥルギーの表出、深い歌心は見事だった。第 1 2 番「葬送」。第 1 楽章の変奏曲の性格付けがきちんとなされていた。第 2 楽章のスケルツォの性格付けも申し分ない。第 3 楽章の葬送行進曲の深さ。深い歌心が加わっていた。第 4 楽章。ここは表現が難しい。迫は一気に弾き進め、しっかり締めくくった。休憩を挟んで、後半は第 1 8 番から始まる。第 1 楽章。第 2 楽章、スケルツォ。歌心、スケールの大きさが調和していた。第 3 楽章、メヌエット。歌心十分であった。第 4 楽章。集中力が強い、スケールの大きな、迫りに満ちた演奏であった。第 3 1 番。第 1 楽章の素晴らしいカンタービレは忘れがたいものであった。第 2 楽章の生の戦い。第 3 楽章の苦悩、後悔の心。救いと祈り。これらが聴き手に伝わり、深い感銘を与えた。このシリーズも後 1 つとなった。最後はどの様な締めくくりになるか。これには目が離せなくなるだろう。

(6 月 6 日 第一生命ホール)

B) コーロ・ソフィア 第 6 回演奏会

高田三郎の声楽即品を取り上げているリヒトクライスの中心的存在である鈴木茂明率いるコーロ・ソフィア第 6 回演奏会は、高田三郎、ブラームス、ドヴォルジャークの作品による演奏会であった。まず、今年が生誕 170 年となるブラームス。作品 112 より「憧れ」、「夜」。作品 64 から「故郷に」。この 3 曲は重唱曲として作曲されていた。こうした曲が合唱曲として演奏されると、ブラームスの渋く、深味に満ちた味わいが伝わりやすい。演奏もブラームスの渋さ、深さを表現していた点では成功したといえよう。

高田三郎「心象スケッチ」。全 4 曲からなる無伴奏合唱組曲で、宮沢賢治の詩による。無伴奏という形式が、かえって宮沢賢治の世界を表現するには適している。その詩人の孤独な心の中が自然に伝わっていた。

ドヴォルジャーク、ミサ曲、作品 86、二長調。ドヴォルジャークの祖国、チェコの自然に根ざした信仰心あふれる音楽である。自然な流れを尊重した演奏を評価したい。また、オルガンを担当したトーマス・マイヤー・フィービツヒの好演もあげておこう。

アンコールには、ブラームス、高田三郎の作品が演奏され、余韻豊かに締めくくった。

(7 月 26 日 紀尾井ホール)

C) 二期会「ばらの騎士」

2002 年、創立 50 周年を迎えた二期会の創立記念公演シリーズの最後を飾るリヒャルト・シュトラウス「ばらの騎士」は、ケルン市立歌劇場との提携公演であった。ケルン市立歌劇場。かつて、二期会の花形歌手だった、今は亡き大橋国一、NPO「みんなのオペラ」を設立して、オペラ普及を進めている岡村喬生が専属歌手として活躍した。彼らの活躍がドイツでの日本人歌手の活躍への礎となったことを忘れてはなるまい。今回の提携公演はそうした素地あって実現したものともいえよう。ギュンター・クレーマー演出の舞台は、第 1 幕がこの作品の背景となった 1740 年代、第 2 幕がまさにオーストリア・ハンガリー帝国末期の 1910 年代、第 3 幕が 1960 年代という設定となっている。つまり、在りし日のヴィーン、20 世紀から現代に至るヴィーンを舞台にして、このオペラの主題「時の移ろい」を表現したものといえる。そうした点では成功していた。しかし、過去にこのオペラを見た人たちの目には、あまりにも豪華な舞台に慣れたせい、物足りなさを感じた人も少なくないだろう。この舞台のあり方には、リヒャルト・シュトラウスのオペラにも新しい演出による舞台作り、オペラ作りが求められていることが感じられた。

東京都交響楽団は、エマニュエル・ヴィヨームの指揮の下、いささか堅さが見られたものの、リヒャルト・シュトラウスの世界を形作っていた。6 月のブラームスシリーズの好評ぶりからして、リヒャルト・シュトラウスの音楽作りにも生かされていたことをうかがわせた。

歌手陣では、まず、オックス男爵を演じた鹿野由之がこのオペラの中心に相応しい歌唱、演技を見

せたことをあげたい。このオペラの真の主人公ともいわれる、重要かつ難役を見事にこなした。大倉由紀枝の元帥夫人。愛人ある身で、いずれ年老いていくことを悟り、若い愛人が愛する女性とともに新しい道を歩む時、寂しく身を引く女性を演じていた。井坂恵のオクタヴィアン。つねにひたむきで、誠実な青年貴族を演じていた。また、女装して、オックス男爵をタたぶらかす場面でのコケットな性格も引き出していた。澤畑恵美のゾフィー。これもひたむきで、恋を知り、大人の女性に成長していく姿を演じていた。アンニーナを演じた西川裕子、警部役の池田直樹などの好演もオペラ全体を引き締め、見応えあるものにした。

ちなみに、二期会は、11月にはベルク「ルル」3幕版、2004年2月にはリヒャルト・シュトラウス「エジプトのヘレナ」を日本初演するという。これらの上演にも期待したい。

日本のオペラは新しい時代を迎えた。ヨーロッパの歌劇場との提携公演はその現れであろう。10月には、藤原歌劇団がフランス、トゥールーズ・キャピトル劇場と提携して、グノー「ロミオとジュリエット」を上演するという。二期会の試みが新たな時代を切り開いたことを裏付けている。そうした、新たな試みが日本のオペラをどう変えるかが問われるだろう。

(7月27日 東京文化会館)

D) 杉谷昭子 ベートーヴェン、ピアノソナタ全曲演奏会 第4回

2002年から始まった杉谷昭子のベートーヴェン、ピアノソナタ全曲演奏会はこれで4回目となった。このシリーズは、杉谷自身のベートーヴェン、ピアノソナタ全集CD発売に合わせて行われている。今回は、第14番、作品27-2、嬰八短調「月光」、第15番、作品28、二長調「田園」、第16番、作品31-1、ト長調、第17番、作品31-2、二短調「テンペスト」が演奏された。

まず、第14番「月光」。杉谷自身、このソナタ全体の中心動機となる *c i s - h - a - g i s* の下降4度の旋律線をピアノで示して、解説を加えてから、始まった。暗く沈んだ第1楽章、激しい第3楽章の間に挟まれた第2楽章の明るさが際立っていたことから、楽章ごとにテンポを上げながら、全曲の中心が第3楽章にあることをはっきりと示していた。また、全体の張り詰めた雰囲気強い印象を残した。

次は、第15番「田園」。第1楽章にキズが生じたことが残念だったにせよ、こちら集中力の強い、味わい深い演奏だった。ことに、第2楽章の沈潜した味わいを評価したい。楽章全体をじっくりと歌い上げていた。第4楽章の歌に満ちた、スケールの大きな演奏も素晴らしかった。

休憩後は、第16番で始まる。これも味わいに満ちていた。ことに、第2楽章の深々とした歌は印象的であった。両端楽章も明るさに満ちた、はつらつとした演奏であったことも付け加えておこう。

最後は、第17番「テンペスト」。これも、杉谷自身の解説があってからとなった。これも、両端楽章のドラマトルギーの表出が見事だった。ことに、第1楽章再現部のレチタティーヴォは緊張感に満ちた歌が聴こえ、深い情感に満ちていた。第2楽章の深い味わいに満ちた歌も忘れられない。アンコール。ドビュッシー、ベルガマスク組曲から、第3曲「月の光」。9月11日が仲秋の名月ということから、「月光」にちなんで演奏された。これもリサイタルの締めくくりに相応しく、余韻たっぷりであった。

このシリーズもそろそろ中間点にさしかかる。杉谷のピアノは、回を追うごとに円熟味を増している。次回はどうか。

(9月6日 浜離宮朝日ホール)

11) ピアノで綴る癒しのメロディー 広瀬美紀子
～リサイタルを開くにあたって～

心の中で眠っていた【夢とロマン】を集めたら、こんなプログラムになりました・ロマンティックな思い出・・・どこかで歌った優しいメロディー...

子供時代の大切な思い出...懐かしい情景の中、ノスタルジーに溢れるコンサートだと思います。ジャンルを越えた新感覚のリサイタルと自負しております。

ぜひ、お出かけくださいませ。

プログラム： 子供の情景 シューマン他
2003年11月16日(日) パルテノン多摩 小ホール 2:30PM. ~
日本音楽舞踊会議後援
入場料；大人 3500円 小学生～大学生 2500円

クリックすると、内容の詳細がごらんいただけます。

12) 訃報

兼永史郎氏

日本音楽舞踊会議特別会員(元：会計監査役) >

9月10日(水)にご逝去されました。

兼永氏は、故菅原志有次氏とともに1980年代～90年代にかけて長きにわたり会の会計監査役をつとめられました。ご冥福をお祈りいたします。

お通夜は 9月12日(金) 午後6時より

告別式は 9月13日(土) 午前11時より、いずれも株式会社セレモ/高根北習ホールにおいて行われました。

戸田邦雄氏

作曲家で元外交員の戸田邦雄氏が2003年7月8日に逝去されました。戸田氏は外交官と作曲家の両道を歩む特異な人生を歩んだ方で、『音楽の世界』にもたびたびご執筆いただきましたが、氏のインタビュー記事は、ホームページ図書館にも掲載されています。

なお、会代表委員の助川敏弥が書いた戸田邦雄氏の追悼文が、今号に掲載されております。

通夜、告別式は高円寺セレモニーホールにて、7月11日(金)、7月12日(土)に行われました。

ご購入ありがとうございました。

このメルマガに記事を掲載したい人、また購読を薦めたい人、ご意見をお持ちの方、購読を中止したい方がありましたら、事務局長にメールをお送り下さい。

メールの宛先：中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

メールマガジン版『音楽の世界』2003年9月号

(完)
